

第8 監房



柴田錬三郎



第 8 監 房

昭和三十八年十月十五 初版発行
昭和三十八年十月三十日 再版発行

定価 三五〇円

著者 柴田 鍊三郎
発行者 豊島 清史
印刷者 菅生 定洋

発行所 株式会社 光風社

東京都千代田区神田錦町三ノ一四
電話東京(23)〇二三八番
販路東京 五六五二六番

落丁・乱丁は御取替いたします。

目次

拳銃物語

五

帝国ホテル

三

銀座ジャングル

二五
車

仏蘭西の男

二六

第8 監房

二〇九

装幀 宮島 美明

拳銃物語

発端

十九世紀の末、アメリカのシカゴで一挺の拳銃が生れた。ベビー形無鶏頭のコルト式六連発であつた。拳銃は、種々なる階級と性格の人々の手を転々とし、二十余年間のうちに、二人の人間を射殺した挙句、アメリカの何処にも身を匿す余地をうしなつたある兇惡なギャングとともに、太平洋をわたつて、上海に到着した。そこで、さらにもう一人の若い中国美人の命を奪つてから、警察にひき渡された。が、程なく、賭博癖のある老いた警官によつて盗み出されて、仏租界のとある裏街にある薄穢い古道具屋へ売りとばされたのであつた。

以来、拳銃は、「門に俗客なく、古人の書を読む」といつたような、きいた風な聯をかかげた古道具屋の店奥で、ひしやげた奢輪（鳥籠）や、糸の切れた胡弓や、虫に食いちらされた古拓本や、すりかれた馬褂兒や、破れた褲子などと、一緒に、埃をかむつて、およそ十年あまりをすごしたの

であつた。

一九三七年——昭和十二年の春、拳銃は、ようやく新しい主人の手に移ることになった。

まだ三十歳前だが、その端正な風貌に、どことなく虚無的な翳をただよわせた日本人が、ぶらりと、その古道具屋へ入つて来て、物倦げに、ガラクタを見まわすうちに、ふと、「不老長寿虎骨追風薬」というレッテルを貼つた怪しげな薬罈に目をとめて、手に把つた。はずみに、北京絨緞のかげから、拳銃が、かたりと、床へ落ちたのである。

日本人の興味は、薬罈から、拳銃に移つた。

拳銃が、あまりにも古風なかたちをし、輪胴に弾薬を装填そうてんしたり、空薬莢を抜くには、指でぐるぐるまわさなければならぬのをしらべた日本人は、これが十九世紀の製品であるのをたしかめて、自分の嗜好にかなつている微笑を泛べた。

日本人河辺隆治は、詩人であつた。堂上華族であつたが、去年ただ一人の肉親であつた後見の伯父が逝くと、ただちに一切の財産を金にかえて、あてどない世界放浪の旅に出たのである。

十九世紀の古風な拳銃をただ一挺たずさえて、これから、ヨーロッパをさまよう趣向は、彼の詩魂を満足させるものであつた。

三日後、拳銃は、河辺の上衣のかくしにひそめられて、マルセーユ行の大阪商船S××丸に乗つたのであつた。

第一話 黒 真 珠

一

船は、今、速力をゆるめて、午後一時過ぎの強烈な陽光の下に、ひらたく横たわつたセイロン島のコロンボ港内へ進み入つていた。埠頭^{ふと}にうごめく人の群や、紅褐色の煉瓦建築がけぶつたように並んだ風景が、次第に、はつきりと目に映じて来た。

小森由香子は、アームチェアをならべたプロムナード・デッキに立ち、欄干に手を置いて、遠い眼^{まなざし}眸を、港へ投げていた。

——とうとう着いた。

漠然とした不安をともなつた孤独感が、由香子の胸にたゆとうていた。一瞬、爽^{さわ}やかな微風が、白い頬を、なで過ぎた。

背後に、靴音が停まつた。

「つきましたね」

ひくい声が、かけられた。

由香子は、振り向かず、「ええ」と頷いた。上海から乗つて来た河辺隆治という男の、常にくくおさえた声が、妙に魅力があるのを、口をきいた時から、由香子はずうつと感じていた。

——この人とも、永久にさようならなのだ。

昨夜、食堂で一緒だった折、河辺が、もう日本へは帰らぬつもりだ、と云つていたのを、由香子は思い出して、急に感傷の痛みをおぼえた。

「こんな……一年中、暑い国に住むのは、いやですわね」

感傷をおさえるために、由香子は、ありふれたことを云つた。

「一年中暑いから、涼気というやつを、本当に味える国——と、案内書には書いてありましたよ」
河辺は、そう云つて、莖を啜えた。

「インドにはお降りになりませんか？」

由香子は、燐寸の火のつくように、風よけになつてやりながら、何気なく訊ねた。

「ボンベイあたりで、気がむいたら、ふらふらと降りるかも知れません」

「いいご身分ですこと」

そう云つてから、由香子は、相手が皮肉にとりはしないか、とちよつと心配になつた。

しかし、河辺は、別のことを考えているような表情で、青い煙をはいた。

船は、埠頭へ横づけになつた。港の内は、まったく静かで、彼方の黒い貨物船から流れる黒煙が、

こちらへゆるやかに拡つていた。

タラップが降された。白いターバンを巻いたインド人が、まつさきにのぼりはじめた。

由香子は、河辺に、荷物の検査を頼んで、同じ場所を動かずにいた。

河辺は、大股に戻つてくると、

「植民地のアングロサクソンぐらい不愉快な代物はなさそうだな。燻製くんせいのように無表情で、黒や黄色の人種は、牛馬なみにしか扱わんのだ」

と、はきすてた。

「じゃ、失礼いたします」

「さようなら、奥さん」

握手を交して、由香子が去りかけると、河辺は、ふと、思いついて、

「あ、ちよつと——」

と、呼びとめた。

由香子は、河辺が上衣の内かくしから、拳銃をとり出してすばやくハンカチにくるんでさし出すのに、おどろいて、受けとるのをためらつた。

「貴方は、美しすぎます。……お持ちなさい。ころばぬ先の杖ですよ」

河辺は、声のない笑いとともに、由香子の手へ、それを握らせた。

わずか三日間の交際であつたが、河辺は、由香子の倂おもかげが、おそらく、この後幾年も、自分の脳裡に刻みついてはなれないであらう、とさとしていた。

二

埠頭に降り立つた由香子は、しばし、ぼんやりとあたりを眺めたまま、異国の旅に馴れぬためらいで、足をすくめていた。

真白い服装の見あげるばかり高い白人たち、赤黒い皮膚のせいで目だけが異様にキラキラ光っている丸坊主の土人、紅い刺繡ししゅうの上衣をまとつた唇の厚い女、大きな荷物を頭にのせた半裸体の苦力グリ、それらの雑多な人種の往来の中に立たされた由香子は、その眸に、しだいに困惑の色を濃くして、すれちがつた黒人が、いきなり、べつと足もとへ真赤なベテルを吐き出すのを、はつとして避けるだけで、もう胸が動悸うつた。

この時、由香子の脇に、すつと寄りそつた者があつた。

怯えた視線を向けると、トルコ風の扮装をした一人の少女が立つていた。薄桃色のレースのヴェールで顔をつつみ、わずかにのぞかせた双眸が、異常に青く冴えて、由香子を凝視ぎやうしした。

「ミセス・コモリでいらつしやいますか？」

なめらかな英語の問いは、由香子の口もとに、思わず安堵の微笑を泛べさせた。

そうだとすると、少女は、いんぎんに古風なお辞儀をした。

「わたくしは、コロンボ政庁の水産技師ペーヤソン博士の家のメイドでございます。メルカと申します。お迎えに参りました」

少女は、そう告げて、由香子のスーツケースを受取った。

ヴェールにさえぎられて、はつきりとは見きわめられないにも拘らず、由香子は、少女の美貌につよくうたれていた。いつか、何かの画集で古代ギリシャの彫像の典型として、印象にのこしたある女神が、今思ひ出された。ただ、眸子ひとみに光のない彫像は、柔和な神秘性をおびていたが、目の前の少女の活きている青い瞳は、あまりにもなまなましい光に濡れて、強烈であつた。年頃は、せいぜい十七八であろう。一方、メルカの方も、はじめて見る日本婦人の優雅な面だから、ふかい感銘をうけたらしく、かるい溜息をもらして、ヴェールをかすかにふるわせたものであつた。

ところで、この二人を、じつと見まもるもうひとつの視線が、とある煉瓦建築のかげにあつた。

黒衣の牧師であつた。しかし、黒の中折帽の広鍔の下で光る陰惨すぎる目つき、漂泊で崩れた皮膚は、あまりにも神の使徒らしくなかつた。フランス人か、スペイン系か——その民族の血をくみとることは困難な程、植民地生活の汚染でおほ掩われた容貌であつた。ただ、決していやしい生れでないことは、顔の輪郭にとどめられたいくばくの気品が証明しているようだ。

牧師は、二人を監視するといつても、殆ど無表情で、はた目には、なんとなくそちらへ視線を投

げているといった様子だつた。

しかし、彼は、由香子とメルカが肩をならべてあるき出すや、自分も建物から、つと離れて、足をはこび出したのであつた。

税関を通つて、外へ出ると、メルカは、苦力を呼び、荷物をタクシーへはこばせた。

由香子は、旅人の心がふと落ち込む空虚なやるせなさを宿した眸子を、走り去る窓外へはなつた。スリヤの並木が、あかるく影を落したチャタム・ヨーク街の広い敷石の街路は、静かで、整然としていた。

二人の車を追つて、もう一台の車が、音もなく走つた。

三

車は、ひとすじの平坦な椰子の並木の路へ出た。地平線までひろがる緑の田園の中に、亭々と聳えた樹林が散在し、それを縫つてゆるやかにうねる河には、水牛の群がうごめく。透いたような薄い雲の下に、円頂塔が、くつきりと浮いている。水甕を携えた女がすれちがう。

「奥さま、わたくしは、ペーヤソン博士から、奥さまを、このグランド・ホテルに御案内して、長い旅のおつかれを癒やして頂くように命じられて居ります」

「どうぞ——」